

E  
エッセイ  
Essay.豊橋で出会った優しさは  
一生の宝物詩集「ネバーランド」筆者  
豊橋在住の詩人 中国出身  
席 夏蓮

来日してから、私の親の年代の方とお話する機会がたくさんありました。

ある日、病院の待合室で、隣に居合わせた私と年が近い娘さんをお持ちの奥さんとお喋りをしていました。

「へえ、あなた、中国人なの。」

「そうです。日本にいるから、親孝行が何一つできないんですよ。」

「まあ、親はね、子どもが元気にしていれば、いいのよ。」

「そうですね。でも、元気じゃないんですよ。」

「あっ!」隣の奥さんも私も、思わず吹き出しました。

二人は乳がん患者同士だということを忘れていたのです。

私は9年前の子育ての真っ最中に、乳がんと告知され、入院しました。手術を受けた後は、育児に追われ、忙しい日々を過ごしていました。8年前、主人の転勤で豊橋に移り住み、子どもの幼稚園の友だちのお母さんの紹介で、「ふれあい日本語教室」と出会いました。私は中学から大学まで長年日本語を勉強してきたので、その経験を生かし、地域の外国人に日本語を教えるボランティアを始めました。そのお陰で友達も増え、豊橋での生活が一段と楽しくなりました。

ところが、その1年後に乳がんが再発しました。2度目の手術を経て、抗がん剤治療を受けることになりました。治療中は体調不良が長引き、育児も家事もままならないことが何より辛かったです。

抗がん剤の副作用で、料理を作るとその匂いで吐き気が止まらない日々、どうしようもないだるさで、ろくに子どもの相手もできない苛立ち、めまいで買い物にも行けず、空っぽの冷蔵庫と睨めっこの夕方…。そんな時、思いがけない優しさに救われました。ボランティア仲間の友人がサンタさんみたいに、手作りのピザや、焼き立てのパンを届けてくれました。近所の奥さんが家の子を自分の家で預かり、おやつも夕飯も済ませてから、玄関まで送ってくれました。友人が新鮮な野菜などで満杯のレジ袋を差し入れてくれました。

そしてありがたいことに、近くの保育園には、病気などで育児が困難な親のための一時保育があり、この制度のお陰で、私は保育園に子どもを預け、安心して通院することができました。

また、いつも利用していた生協の「たすけあいの会」のお世話になり、協力会員のベテラン主婦の方に買い物、炊事、洗濯、掃除まで手伝っていただき、本当に助かりました。

たくさんの方々を支えられたお陰で、私は不安を乗り越え、無事抗がん剤治療を終えました。

そして今年1月、私が闘病中から書き始めた詩40編をまとめた詩集「ネバーランド」を文芸社より出版しました。どれも豊橋生まれの詩です。今まで出会った数え切れないほどの優しさへの感謝や、乳がんになって改めて感じた命の尊さ、人と人とのつながりの大切さを日本語で綴りました。友人の画家、すぎうらよしこさんが素敵な表紙絵と挿絵を描いてくれました。

沈丁花、タンポポ、桔梗、ビオラ、つゆ草、金木犀など四季折々の花や、豊橋の風物詩、朝市、家庭菜園も題材にしました。ここで、一編を「おすそ分け」します。

言葉でうまく伝えられぬ

この思いを

じっと抱きしめてみると

甘くなる。「無花果」より

豊橋の豊川堂本店、精文館本店で販売中の他、全国の書店やネット書店で注文できます。私のせめてもの恩返しです。ぜひ、お読みください。



表紙絵を描いたすぎうらよしこさん(左)と筆者